神栖ディスカバリー File 04

特集

広報かみすが伝えてきたもの

400号記念✶特別座談会

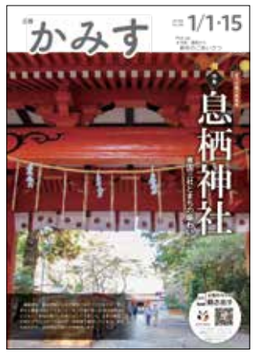
2005年8月1日、神栖市の誕生とともに創刊した「広報かみす」。毎月1日と15日(1月号と9月号は合併号)に発行し、今号で400号を迎えました。広報紙づくりの舞台裏や紙面に込めた思いなどを歴代担当者が語り合います。

*2005*年　創刊号
神栖市誕生を迎えた記念すべき第1号の表紙は鹿島灘

*2015*年 市制施行10周年
「市民音頭」をはじめ、さまざまな記念行事を開催

*2020*年 新型コロナウイルス
相談窓口の開設などを掲載。この後、複数回にわたり特別号を発行

*2019*年 国体へ行こう
茨城での開催は45年ぶり。市はカヌースプリントなどの会場となった



*2018*年「まちの魅力再発見」
当たり前すぎて気づかなかったまちの魅力を再発見する特集がスタート

手作りでスタートした広報紙

——神栖市の行政情報や地域の話題を広く伝えるのが広報紙の役割です。まず、その広報紙がどのように作られてきたのかを聞きたいと思います。創刊当時と今ではだいぶ変わったのでしょうか?

作田：創刊号より少し前の話になりますが、私は合併前の神栖町時代に広報紙を担当していました。当時の広報紙は2色刷りで、フルカラーは1月号と9月号の年2回だけでした。取材に出かけて、フィルムカメラで写真を撮り、ワープロソフトで記事を入力し、編集ソフトで紙面を組み立て、最後は白黒反転したネガで校正をする。とにかく一から手作りでしたね。

岩井(京)：私は創刊の翌年4月から広報紙を担当し、いきなり一眼レフカメラを持って取材に行くことになり「えっ、どうしよう」と戸惑いました。作り方は作田さんとほぼ同じで手作りです。内容の面では神栖地域と波崎地域の一体感を出そうと、市内にある全部の学校を順番に紹介するコーナーを設けました。

岩井(栄)：私が広報紙の担当になったのは創刊から4年目です。編集ソフトは使いやすいものに変わり、デジタルカメラで、とにかく枚数をたくさん撮れるようになったので、その点は楽になりました。

松﨑：私は今年4月から広報紙の担当になったばかりですが、今とは作り方が全然違っていて驚きました。今は紙面のデザインや特集ページなどは制作会社と一緒に作っています。

読んでもらうための工夫あれこれ

——広報紙を一人でも多くの市民に読んでもらうため、どのような工夫をしてきましたか?

作田：紙面に市民の生き生きとした顔がたくさん載るよう心がけました。広報紙を見た方が「写真がほしい」と市役所に来てくれると、私たちもうれしくなります。当時は取材や撮影でまちを歩いていると、市民から「私たちの写真を撮って」と声をかけられることもあり、皆さんが快く撮影に応じてくださいました。

岩井(京)：私はふるさと紹介コーナーを任されたのですが、当初は原稿を募集しても応募がありませんでした。でも、ただ待っているだけでは楽しく読んでもらえる紙面はでき

*2011*年 東日本大震災
市内全域で地震による爪跡が残る中、人とまちを記録し続けた

*2010*年 成人式典
100号の記念号。毎年のように2月の広報紙は新成人の笑顔があふれる

*2007*年 第1回スポレク祭
初めてのスポーツレクリエーション祭を開催。約4,000人が集まった

*2015*年 誕生!カミスココくん
今や皆が知っている市のイメージキャラクター。598作品の中から決定

*2012*年 未来への伝言
震災から一年。親から子、子から孫へ語り継ぐべき震災の記憶を特集

*2023*年 市民を守る
コンビナートを有する神栖の消防署の"今"を紹介

*2021*年 オリンピック
市内で事前キャンプを行なったチュニジア共和国競技チームを中心に紹介

歴代担当者による座談会